

夫は4泊5日の一時退院を終え、11月7日に再入院、8日から3回目の治療に入りました。自宅では疲労感が取れないと言って、横になっていることが多かったものですから、再入院してお医者様に任せられるということで、ほっとしました。幸い、3回目が順調に進み、味覚障害が徐々に薄れて、少しずつ食べて、おいしいと感じられるようになったのも嬉しいかぎりです。



Deseret News<Movie review>より

いつものように見舞って、マッサージをしてあげた後、私は公開されたばかりの《パウロ～愛と赦しの物語～》を見に、ヒューマントラストシネマ渋谷に足を延ばしました。カトリック中央協議会広報の推薦を受けているアメリカ映画です。物語の舞台は皇帝ネロ(治世 54-68AD)の支配下のローマ、主人公は使徒パウロと使徒言行録の著者と見なされている医者ルカです。

皇帝ネロはローマの大火は異教徒クリスチャンによるもの、その首謀者はパウロであるとして、残忍なキリスト教徒迫害を始めました。獄中のパウロの安否を問い、パウロからこの迫害の苦難に対処すべき言葉を得ようとルカが訪ねて行くところから物語は始まります。都ローマには世界の民族が集まっていた。パウロはローマ市民権をもつユダヤ人、ルカはギリシャ人です。ローマ人であるプリスカとユダヤ人の夫アキラ、そのほか、地中海沿岸や、アフリカからも、商人として、兵士として、奴隷として、様々な民がローマに住んでいました。アキラ、プリスカの家を Community(共同体)として、迫害を逃れて、クリスチャンが集団で潜んでいました。ルカはここに住みます。

パウロは自らが過去に迫害したステパノを始め、老若男女のまなざしが心に突き刺さって、慚愧の思いで苦しんでいます。ルカはパウロの言葉を通して、イエス・キリストの言葉に触れ、神を信じる者とさせられたのだから、パウロの回心からの道のりを伝えてくれるように頼むのです。パウロは既に役目を終えたと断りますが、アキラ、プリスカの家で起きた悲しい事件を聞いて、決断し、ルカに語り始めます。その事件とは孤児になった少年がアキラ、プリスカの家で守られ、愛されて、クリスチャンとなり、彼らの苦境の時に、お使いを進んで引き受け、帰路、暴徒に惨殺されてしまった事です。これを怒り、目には目をと、正義を求めて暴力をもって報いると言う人々がでます。アキラたちは悲しみながらもキリストの赦しを信じ続けます。パウロは「生きるのも主のため、死ぬのも主のため」と言い、少年の生と死は神の御手にあつたと信じます。逃れる道も模索しながらも、迫害による死も神に受け入れられていると受容します。

背景として牢獄の管理者のローマの高官の娘が重体になり、回復を祈り求めるローマ人の信仰の様子が描かれます。家の守護神だけではなく、力あると信じられる神々に祈り、「効き目」があつてこそ、「聞かれた」となる。効き目がなければ祈りが足りないと言うことで、娘の症状が重くなるにつれ、不信仰を責めあう状態になっていくのです。偶然ルカが医者であることから、助けを求められ、首尾よく治療できました。その恩恵もあり、アキラ、プリスカたちは、ルカの記した文書を携えて、迫害を逃れていく道を備えられます。けれどもパウロは斬首されました。天の国に迎え入れられたパウロがステパノを始め、老若男女から笑顔で迎えられ、キリストがやってくる場面で終わります。

私はパウロのパリサイ派の学徒としての研鑽、クリスチャンの捕縛、そして回心、その後の小アジア、ギリシャ地方での宣教活動と異邦人諸教会の姿など、出来るだけ時代考証に基づいたものを見たいと期待していました。この映画はパウロの最晩年と迫害がテーマでした。あまりにも暴力的な異教社会にあつて、パウロが説く、人間の尊厳を伝える「神の愛」、生きる喜びを与える「愛し合う交わり」の宣教は、異邦人に、すぐに、喜んで、受け入れられたであろうと実感しました。